

軍隊と一般の人々をどうつなぐか
 ——英国国立陸軍博物館 (NAM) の新たな試み——

辻本 諭
 TSUJIMOTO Satoshi

はじめに

2018年9月、筆者は軍事／戦争博物館に関する研究調査の一環として¹、英国国立陸軍博物館² (National Army Museum、以下NAM) を訪問した。ロンドン南西部のチェルシー地区、王立チェルシー病院³に隣接する場所に立地する同館は、1971年の開館以来 (法人としての創設は1960年)、17世紀から続く英国陸軍の歴史と活動を社会に伝える役割を果たしてきた。来館者数は、2010年代初めのデータによると毎年25万人ほどで⁴、軍事・戦争をテーマとするものとしては一定の規模とプレゼンスを持つ博物館と言える。今回、筆者がこのNAMを訪れるきっかけとなったのは、同館が2014年5月から17年3月までおよそ3年間をかけて行った大規模な改装 (建物を含む) であった。約2400万ポンド (2014年時のレートで約41億円) という巨額の費用を投じて、NAMは一体どのような博物館に生まれ変わったのだろうか。

実は、筆者はリニューアル前のNAMを一度訪れたことがある。2000年代半ば、大学院生として英国で留学を始めたばかりの時に、自分の研究テーマに関連する博物館ということで大いに期待して出かけたことを覚えている。ただ期待に反して、展示内容に特別に心を引かれたり感銘を受けたりすることはなかった。必ずしも細部まで見て回ったわけではなく、したがって今となっては大雑把な印象しか残っていないのだが、武器・兵器、軍服や軍旗といった昔ながらの軍事史をなぞるような展示物を見ながら、英国陸軍の歴史をクロノロジカルに (発展史的に) 辿っていく内容であったように記憶している。それは、21世紀の開始とともに研究の門をくぐり、それ以来「新しい軍事史」という潮流の中に身を置いてきた筆者にはひどく物足りなく (視野が狭すぎるように) 感じられた⁵。今回、NAMを再訪した理由は、以上の経験を下敷きにして、上記の大改装を経て展示の内容と方法がどのように変わったのかを検証し、その背景についても併せて考察してみたいと考えたからであった。



2017年3月にリニューアルオープンしたNAM (筆者撮影)

以下、本論は、NAMでの視察調査と同館に関わる文献調査 (インターネット上のものも含む) をもとに、その展示内容と方法について、またそれが持つ一般社会への発信力について具体的に検討するものである。まず第1章では、分析の前提として、リニューアルの目的とそれに沿って設計された新博物館の構造について確認する。第2章では、展示の内容と方法について、テーマギャラリーごとに具体的な事例を挙げながら考察する。第3章では、NAMが意欲的に進めている学校教育との連携に注目し、同館が学校向けに提供しているワークショップや教材の内容について検討する。以上を通じて、新しいNAMを、近年の軍事史研究の動向と現在の博物館のあり方をめぐる議論の中に位置づけてみたい。

以下、本論は、NAMでの視察調査と同館に関わる文献調査 (インターネット上のものも含む) をもとに、その展示内容と方法について、またそれが持つ一般社会への発信力について具体的に検討するものである。まず第1章では、分析の前提として、リニューアルの目的とそれに沿って設計された新博物館の構造について確認する。第2章では、展示の内容と方法について、テーマギャラリーごとに具体的な事例を挙げながら考察する。第3章では、NAMが意欲的に進めている学校教育との連携に注目し、同館が学校向けに提供しているワークショップや教材の内容について検討する。以上を通じて、新しいNAMを、近年の軍事史研究の動向と現在の博物館のあり方をめぐる議論の中に位置づけてみたい。

1. リニューアルの目的と新博物館の構造

英国国防省が2017年に公表した『軍隊博物館 (service museums) に関する調査報告』によれば、NAMの使命 (mission) は、「英国陸軍の物語 (story)、それが果たしてきた役割や世界史におけるインパクトに関わる物語を集め、保存し、伝えること。博物館体験 (museum experience) の提供を通じて、最大限幅広く社会の必要に応え、英国の一般の人々 (public) と陸軍とを結びつけること」である⁶。この点を踏まえつつ、今回のリニューアルについて、当時の館長であったジャニス・マリーは『ガーディアン』紙の取材に対し以下のようにコメントしている。

私たちの展示を新たに発展させることのできるこのチャンスにとってもわくわくしています。というのも、私たちの展示の中には作られてから25年を過ぎたものもあって、それらは現在の見学者の心にはもはや響かなくなっているからです。たしかに、現在のロンドンの気質にそぐわない展示になってしまっているのです。今回のリニューアルは、過去600年間の英国陸軍のわくわくする物語に、私たちが真剣に、また少し違った視点から目を向けることのできる、容易には得がたい機会なのです。それはまた、英連邦や女性の役割に関する物語のような、25年から30年くらい前にはあまり重要性を認められていなかったすべてのテーマに対して、しかるべき展示スペースを確実に割り当てるようにする機会でもあるのです⁷。

ここに端的に説明されているように、NAMの大改装の目的は、開館から40年余りが経過してすでに時代遅れとなっていた展示の内容・方法を根本的に見直し、現在の人々の趣味・関心に合ったものの一から作り替えることにあった。この目的は、まず何よりも新博物館の構造に反映されている。展示の具体的な内容については次章に譲るとして、まずは博物館全体の作りについて見ておこう。



館内中央の広い中空スペース (筆者撮影)

右の館内マップに示されているように、新NAMの建物は、地階、1階、2階の3つのフロアからなり (各階は同一平面ではなく、階段で結ばれた上下の立体構造になっている)、5つの常設展示ギャラリーのほか、特別展示ギャラリー、学習センター、研究センター、カフェ、ショップから構成されている。1階の入り口から中に入るとまず目につくのは、建物の中央部に全階を縦断する巨大な中空スペースが確保されていることである。この吹き抜け構造によって、どの階からも館内を見渡すことができ、また上部にはガラス窓が設置されていてつねに十分な外光が採り込まれている。白を基調とした建物内部の彩色とあいまって、博物館全体が開放的で明るい雰囲気包まれている。来館者が入りやすく、また見学中、快適な時間を過ごせるようにとの工夫が感じられる。



館内マップ

常設展示に目を向けると、上記の改装目的を反映して、クロノロジカルな通史ではなくテーマの追求を軸としたギャラリー構成となっており、17世紀から現代まで通時的に考察しうる「軍人 (Soldier)」、「陸軍 (Army)」、「戦闘 (Battle)」、「社会 (Society)」、「洞察 (Insight)」の5つのテーマが扱われている。このアプローチの転換により、これまで十分に取り上げることができなかった多くの問題にスポットライトを当て、またそれを切り口として時代の変化と連続性を浮かび上がらせることが可能になると、NAMの上級研究学芸員エマ・モーズリーは指摘する。彼女によれば、それは見る側にとって「より理解しやすく」「じっくりと考えさせるような」展示である⁸。その内容と方法がどのようなものか、またそこには展示者のいかなる意図が込められているのか、次に5つのテーマギャラリーについて具体的に見ていくことにしよう。

2. 展示の内容・方法と展示者のメッセージ-5つのテーマギャラリー

本章では、5つのテーマギャラリーの内容をそれぞれ検討した上で（検討する順序は筆者が見学した順番による）、そこに共通して見られる方法と、展示者のメッセージについて考察する。

まず、「軍人」ギャラリーは、従軍する人間の経験がいかなるものであった（ある）かを、英国陸軍の歴史を通じて考えることがテーマとなっている。一人の人間が、軍に入隊し、訓練を受け、従軍生活を送り、除隊し復員するまでの過程を、具体的な個人の語り・エピソードをもとに、またそうした経験を理解する助けとなるさまざまなモノ（たとえば、兵士の徴募に使われた部隊旗・ポスター・身体計測器・楽隊の楽器や、従軍中の装備・生活用品・医薬品・嗜好品など）の展示を通じて丁寧に描いている。特徴的なのは、軍人の経験を多面的に捉え（たとえば、「食事」「余暇活動」「医療」「犯罪と処罰」「同僚との絆」「家族」などのトピックが取り上げられている）、それが決して戦闘に限定されるものではない（軍人にとって戦闘が最重要の任務であることは間違いないが、決してそればかりではない）ことを示している点である。近年の軍事社会史研究の動向と成果を十分にふまえた内容であると言えるだろう⁹。

次に、「陸軍」ギャラリーでは、制度・組織としての英国陸軍の歴史が辿られる。それが17世紀という動乱の時代の中でどのように成立したのか、また18世紀以降、その規模や構成、活動範囲がいかに拡大・多様化していったのか、さらに現代における陸軍の役割とは何かといった問題がわかりやすく説明されている。とくに、カラフルに彩色された視覚資料（図表・グラフなど）を効果的に用いることによって、煩雑な解説文が省かれているのが印象的である。一例として、17世紀後半における陸軍の成立過程についての展示では、

「王権の力」「議会の力」「陸軍の力」の推移を壁面に折れ線グラフで示すことで（縦軸は力の強弱、横軸は時間の推移〔1642年から90年まで〕を表す）、シンプルかつ説得的な説明を行うことに成功している。折れ線を除くと、壁面には「折れ」の部分（転換点）に該当する年号・事件の記載と、事件に関する簡単な説明が書き込まれているだけであるが（関連する絵画・武具などの展示はあり）、グラフと合わせて見ることで、英国陸軍が王権と議会の対立・交渉・融和の中で成立した経緯が的確に跡づけられている（1689年に3つの線は合流し、以後1本の線となる）¹⁰。本ギャラリーでは他に、戦争と結びついて形成されてきた陸軍の伝統・アイデンティ



「陸軍」ギャラリー [陸軍の成立過程についての展示] (筆者撮影)

ティや、帝国の拡大（植民地の獲得・維持）と陸軍の関係、現代の陸軍が担う平和維持活動などの問題が取り上げられている。いずれも狭義の軍事史の枠を超えた学際的なトピックであり、見学者の幅広い関心を意識した内容になっていると言えるだろう。

「戦闘」ギャラリーは、英国陸軍が経験した戦争を取り上げながら、戦術・軍事技術の変化とともに戦闘がどのように変わっていったのかを考える展示スペースである。「陸軍」ギャラリーと同様に、テーマを軸に据えつつも時系列に沿って話が展開されていく。展示は兵器、軍服、戦場ジオラマなどが中心であり、旧来の軍事／戦争博物館との連続性を感じさせる作りとなっている。ただし、軍事と科学技術の相互作用や、戦闘における人間的要素（リーダーシップや感情）の重要性に注目するなど、見る側の多面的な考察を促す視点もまた十分に用意されている。

一方、新NAMにおける展示の新しさを最も強く感じられるのが「社会」ギャラリーである。ここでテーマとされているのは「社会と不可分の存在としての陸軍」であり、両者の結びつきと影響関係がさまざまな観点から検討されている。注目すべきは、「(市民社会における) 駐屯」「報道・検閲」「真実・フィクション」「追悼・記憶」「チャリティ」などの比較的よく知られた（「かための」）問題と並んで、私たちの生活に直接関わる（「ゆるめの」）トピックが積極的に取り上げられていることである。たとえば、「ことば」「音楽」「ファッション」「玩具」などを事例として、市民



「社会」ギャラリー入口（筆者撮影）

社会が陸軍からいかに大きな影響を受けてきた（いる）か、しかも私たちがそのことに対していかに無意識であるかが明らかにされている。同様に、扱われる史資料、展示のしかたにも工夫が見られる。たとえば、上記のトピックを検討する展示スペースでは、チラシやポスターなどのいわゆる「エフェメラ（ephemera）」が多数並べられ、またネオンサイン・BGM・イラストなどの演出が施されるなど、にぎやかでポップな展示が志向されている。言うまでもなく、こうしたポピュラーカルチャーを重視する展示はNAMにおいてはきわめて革新的であって、それは本ギャラリーの展示物の3分の2が新たに収集された（つまり、それまでは収集の対象とされてこなかった）ものであることによく表れている¹¹。雑多なトピックを一緒に取り上げているがゆえの問題（トピックスペースごとの展示内容・雰囲気の違い、統一感のなさ）が目につくことは確かであるが、しかし全体として見れば、学術的な意味でも（「新しい軍事史」研究と協働できる）、一般受けという意味でも（見学者が関心をもちやすく理解もしやすい）、十分に評価できる展示であると言えるだろう。

最後の「洞察」ギャラリーは、英国陸軍が18世紀以降、世界各地に与え続けているインパクトを、英国の国益・国際関係や植民地問題と関連づけながら考えようとする展示である。ただ残念なことに、このテーマが持つ射程の広さや重要性にもかかわらず、展示スペースや取り上げられる史資料が他のギャラリーに比べると格段に少なく、また地階に配置されていることもあってか見学者の姿をほとんど見かけなかった。NAMの主たる来館者が、自国の陸軍に関心を持つ英国人であることを考えれば、同館において「軍と世界との関わり」が副次的なテーマにとどまることは、ある程度やむを得ない面があるかもしれない。とはいえ、グローバル化が進む現代世界とその中での英国陸軍の役割を考えるに当たって深く探究していくべき重要な問題であり、同ギャラリーの今後の拡充が期待される。

では次に、これら5つのギャラリーに共通して見られる展示方法について検討してみよう。その特徴

として2つの点が指摘できる。まず挙げられるのは、各テーマに対して、複数の切り口から、多様な史料を用いてアプローチしている点である。周知のように「新しい軍事史」は、軍事史を歴史学の他の分野と積極的に結びつけ、より大きな文脈の中で理解していこうとする研究潮流であるが、新NAMの展示にも同様の方向性が看取できる。たとえば、上述した諸事例からは、政治史、国制史、社会史、文化史、科学史、国際関係史など幅広い分野との接合が見られるし、またより広く歴史学の外の領域にまで目を向け協働することで、従来にはなかった展示が生み出されている。こうして、新NAMは「英国国立陸軍博物館」という名称からは想像するのが難しいほど、脱領域的／学際的な内容を持つ博物館となっているのである。

もう一つ展示方法の特徴として挙げられるのは、見学者が自ら参加する体験型の展示が多数用意されている点である。ギャラリーの各所に、展示内容に関するクイズ／ゲームのコーナーや、さまざまなハンズオン展示が配置され、見る側を飽きさせない構成となっている。筆者が訪問した際にも、ライフル銃の仕組みを実際に手で触れて学習する展示や、戦車の中に入り乗員の感覚を体感できる展示には、子供を中心に多くの見学者が集まっていた。また同時に強く印象づけられたのは、こうした体験型展示のいくつかでは高性能の映像・音響技術によってきわめて高いリアリティが実現されているということ



「軍人」ギャラリー [「ドラムの音に合わせて動け」] (筆者撮影)

である。たとえば「軍人」ギャラリーで展示の目玉の一つとなっているのは、新兵が受ける訓練を体験できる「ドラムの音に合わせて動け」のコーナーである。ギャラリーの壁面にはコンピュータスクリーンが投影されており、見学者は、そこに流れる映像と音響に合わせて一連の訓練メニュー（整列・行進・方向転換など）をこなしていく。見学者がスクリーン前の所定の位置（床に軌跡のマークで示してある）に立つとプログラムが立ち上がり（一度に3人が参加可能）、強面の軍曹が現れて訓練が始まる。新兵となった見学者は、軍曹の命令とドラムの音、スクリーンの右上に表示される体の動きに合わせて、兵士として必要な基礎動作を反復的に練習する。見学者の動作はコンピュータに把握されており、命令通りに動いていない場合には軍曹から大声で叱責されることになる。軍隊において身体の規律化がいかにして進められるのかを、身をもって感じることでできる展示である。

このように視覚と聴覚を通じてリアルな体験を引き出そうとする試みは、同じく「軍人」ギャラリーの中央に設けられた「実戦（Action）シアター」や、「戦闘」ギャラリーの入口すぐのスペースに置かれた「ワーテルローの戦いの再現ジオラマ」にも見られる。「シアター」では、部屋を取り巻くスクリーンに歴史上のさまざまな戦闘の映像（再現映像を含む）が音響とともに映し出され、見学者は戦場の過酷な環境を疑似体験することができる。「ジオラマ」では、19世紀の軍事史家ウィリアム・シボンが製作した精緻な立体模型とマルチメディア機器を組み合わせることで、戦いの状況と推移がわかりやすく解説されている。近年、多くの博物館において展示の「スペクタクル化／アトラクション化」が進んでいると言われるが¹²、ここで検討した展示はその動向にまさに合致するものであると言えるだろう。

本章の最後に、ここまで具体的に見てきた展示内容・方法を通じて、新NAMが見学者に向けて何を伝えようとしているのか、同館の理念にも関わるこの点について踏み込んで考えてみたい。第1章の冒頭で言及したように、NAMの使命は「英国の一般の人々と陸軍とを結びつけること」である。開館以来変わらぬこの使命を実現するに際して、リニューアル後のNAMは、ある一貫した方針を持って展示

を行っているように感じられる。それは、見学者に、陸軍とそれに関わる問題を自分に直接関係するものとして真剣に考えてもらうよう努めていくということである。そのために展示者側に求められるのは、見学者に対して特定の見方を押しつけるのではなく、できる限り多面的な（時に対立する）理解のしかたを示した上で、一人ひとりに「自分が」どう考えるのかを問うていく姿勢である。前出のエマ・モーブリーの言葉を借りれば、「それはまさに、疑問を提起すること、そしてその疑問について人々に議論する機会を提供するということ」なのである¹³。

こうした姿勢は、新NAMの展示の至るところに見られる。たとえば「軍人」ギャラリーでは、見学者に「あなたは軍人になることができるでしょうか？」と問いかけることから展示が始まる。こうして見学者は、この問いを自分に投げかけながら、過去と現在の軍人の経験に触れていくことになる。そしてすべての展示を見終えた後に、再び出口において同様の質問が投げかけられるのである。出口付近にはまた、「軍人とその勤務について、あなたはどう考えるか？」という問いかけと、それに対する回答を用紙に記入し掲示するスペースがあり、見学者は展示内容を踏まえて



「軍人」ギャラリー（出口部分）（筆者撮影）

自ら意見を表明し、見学者どうし、また展示者との間で議論が交わせるような工夫がなされている。

見学者の主体的な考えを引き出そうとする展示者側の意図は、「陸軍」ギャラリーの展示においても明確に示されている。たとえば、現代の英国陸軍を扱うスペースでは、「陸軍は何をしているのだろうか？」と題されたボードに、その活動が次のように説明されている。

英国陸軍の目的は、英国のために働き、英国を守ることです。戦争以外のあらゆる手立てを尽くしてもその目的が果たせないとき、私たちは戦争を選択せざるをえませんが、陸軍はその戦争を戦うために存在しているのです。しかし実際には、陸軍の果たす役割はそれがすべてではありません。その活動の中には議論を呼ぶものもあるのです。陸軍は、人質を救出したり、人道的な救援物資の輸送を行ったりしてきた一方で、帝国の拡大のために用いられ、各地域の諸民族を抑圧する役割も果たしてきたのです。陸軍の目的は、複雑で、論争的で、またつねに変化するものです。あなたは、陸軍がどのようなことをしていくべきだと考えるでしょうか？¹⁴

さらに、ギャラリーの出口にはタッチパネルで回答するアンケートコーナーがあり、「英国は陸軍を保持すべきでしょうか？」「次のうち、英国陸軍の役割として最も重要なものは何でしょうか？」「これからの10年間において、英国陸軍が注力すべき問題は何でしょうか？」「百年後に英国陸軍はまだ存在しているでしょうか？」という4つの質問が提示されている（各質問には4つの回答選択肢が用意されており、回答者はその中から1つを選ぶ）。入力された回答データはコンピュータに集められ、その集計結果も公開されている。国防省と結びついた博物館でありながら、陸軍の役割や存在そのものを問う質問が（それを否定する可能性を隠すことなく）投げかけられていることに驚くが、そこからは、見学者（その大半は英国国民）に英国陸軍を自分の問題として考えてもらいたいという新NAMの意志が窺える。

同様の例は「社会」ギャラリーにおいても見出すことができる。すでに触れたように、「社会」ギャラリーでは、陸軍と英国社会との長きにわたる密接な関わりがさまざまな切り口から検討されている。そこで取り上げられる個々のトピックは、もちろんそれ自体考察に値するものであるが、しかし展示者側がギャラリー全体を通じて見学者に投げかけているのは、ギャラリー中央の「討論（Debate）」のボード

に示された次の問いである。

[英国] 社会はいま、陸軍の役割や地位、それが従事する活動についてますます関心を高めています。あなたはどう考えるでしょうか？議論に参加してみましょう。そして、あなたの意見が、他の見学者の意見と比較してどうであるか確認してみましょう¹⁵。

さらにガイドブックでは、この討論に参加することの意味が次のように説明されている。

多くの人々は、軍人たちが戦場に送られ、その結果として自分たちが戦場に行かずにすむという残酷な現実には葛藤しています。[英国] 政府が、私たちの名のもとに陸軍に戦うことを命じるのである以上、すべての有権者は軍人を戦場に送ることについて何らかの責任を共有しているのです¹⁶。

ここでも、新NAMは、見学者をオープンな議論に巻き込もうと試みている。「正しい」知識や価値観を一方的に伝えるのではなく、見る側の多様な反応を引き出し双方向的なコミュニケーションを促すことによって、英国陸軍と一般の人々をつなごうとしているのである。

実のところ、新NAMのこのような手法は決して特異なものではない。日本でもすでに広く知られているように、現在、世界の多くの博物館において、見学者間の見学者と展示者との対話を生み出す展示が模索され、そしてそうした対話が交わされる場（＝フォーラム）として自らを位置づける傾向が強まっている¹⁷。新NAMの展示とそれを通じて発信されるメッセージからは、同館もまたそのような潮流の中にあることが窺えるのである。

3. 学校教育との連携 - ワークショップの開催と教材の提供

21世紀に入り、博物館にとって重要性を増している課題の一つが、学校教育との連携、いわゆる「博学連携」である。これについてはNAMも例外ではなく、『軍隊博物館に関する調査報告』には、地域に対するアウトリーチ活動、なかでも学校教育に対する貢献が同館の果たすべき役割として挙げられている¹⁸。試みにNAMのウェブサイトを見てみると、学校のための個別ページが設けられており、そこでは博物館と学校が共同で行えるさまざまな学習プログラムが提案されている¹⁹。以下では、NAMが学校向けに用意しているワークショップと見学学習用リーフレットについて検討していくことにしよう。

ワークショップは、NAMのスタッフが講師を務める体験講座で、2018年10月時点で19の学習テーマに関する講座（時間は60分または90分）が開かれている。いずれも、博物館の史資料・展示に直に触れながら、学習者が主体的に課題に取り組めるように設計されており、たとえば、グループワーク、プレゼンテーション、講師との対話などの要素が豊富に盛り込まれている。また、対象となる教育段階（Key Stage [KS]）²⁰および学習教科（しばしば複数）が明示されており、学校のカリキュラムとの積極的な関連づけが図られている。

2つのワークショップを取り上げて、その内容を具体的に見てみよう。「君なら入隊する？プロパガンダと新兵募集（Recruitment）」（対象：KS2、歴史・英語）は、第一次世界大戦時の英国で展開された、陸軍への入隊者を募る宣伝キャンペーンについて考える講座である。学習者は、ビラやポスターなどの視覚史料をもとに、そこで用いられている宣伝技術（言葉・レトリック・絵・デザイン）について検討し、いかなるメッセージが誰に向けて発せられていたのか、また人々の日常生活にどれほどの影響を与えていたのかを学ぶ。一方、「新兵募集と徴兵制度（Conscription）」（対象：KS3-5、歴史・シティズンシップ・政治）は、同様のテーマを、より教育段階の進んだ学習者に向けてアレンジしたワークショップであり、扱う史資料・分析視角ともに発展的な内容となっている。たとえば、史資料として、議会下院の議論が取り上げられ（ただし、文字化した史料ではなく、当時の議会の様子を再現したビデオが用いられる）、その分析を踏まえて、「国があなたを戦わせることは正しいのか」という現代にも通じる問題を考えることが学習課題として設定されている。学習者に、軍隊や戦争をめぐる問題について当事者と

しての意識を持たせ、主体的な議論を引き出そうとするNAMの意図がよく表れている。

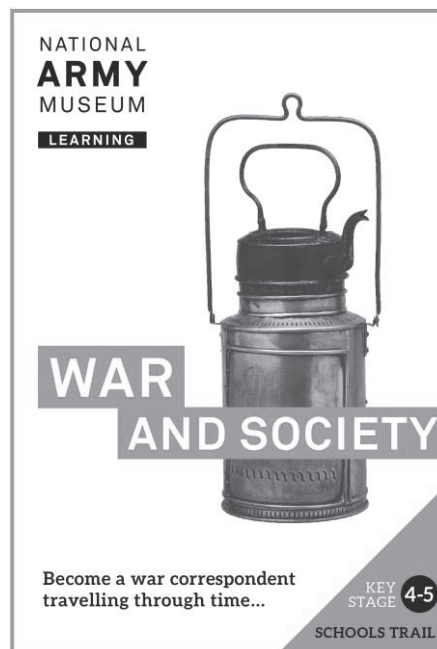
次に、見学学習用リーフレットは、学校が博物館を見学する際に、あらかじめ設定された学習テーマに沿って展示を見て回ることができるように作成された冊子型ワークシートである。ワークショップの場合と同様に教育段階ごとに分けて作られており、2018年10月時点で12のリーフレットが用意されている。一例として、「戦争と社会」(対象:KS4, 5)を取り上げてみよう²¹。まず見学に先立って、学習者には「19世紀を旅して3つの戦争(ナポレオン戦争、クリミア戦争、ボア戦争)を調査・報告する記者」という設定が与えられる。リーフレットには、ギャラリーごとにいくつかの課題が設けられており、学習者は戦争記者としてそれに取り組んでいく構成になっている。たとえば、「軍人」ギャラリーでの課題は以下の通りである。

- ギャラリー内にある、19世紀の兵士が使っていたナップサックの展示を見てみましょう。ナポレオン戦争、クリミア戦争で戦った兵士たちについてどんなことがわかるでしょうか？
- ナップサックの展示のそばに、兵士たちの証言が紹介されています。そのうちの1つを読んでみましょう。戦争の現実を読者に説明するために、あなたは自分の記事の中でそれをどのように引用するでしょうか？
- ギャラリー内にある、兵士が使っていた食器や調理器具の展示を見てみましょう。彼らが食事を準備するときどのような難しさがあったか、グループで話し合ってみましょう。

リーフレットの内容を検討していく中で気づかされるのは、学習者に、史資料を集めそれを根拠として問いに答えさせるばかりでなく、他者に向けて史資料を引用する、あるいはそれをもとに語る課題を課すことによって(たとえば、上記の2つめの課題がこれに当たる)、史資料そのものの多様性や、それが取捨選択されて伝えられる過程、その問題性に目を向けさせるような工夫がなされていることである。この意図は、「社会」ギャラリーでの課題「戦争中、メディアが軍人たちを英雄として描くのはなぜでしょうか？」に最も明確に表れている。同ギャラリーには、情報を伝えるメディアと、それを規制する政府・軍とが、人々の軍人・戦争に対する見方にいかに大きな影響を及ぼしてきたかを説明する展示があり、課題への取り組みを通じて、メディア言説の作為性が焦点化されることになる。さらに、ギャラリー内の「真実を述べる」と題された展示ボードには、軍隊・戦争の歴史叙述に関して以下のような重要な指摘がなされている。

すべての歴史叙述は個人的で選択的なものです。私たちの陸軍についての理解は、軍人や歴史家によって書かれた軍事史(military histories)によって形作られます。しかし、それらに含まれる説得的な議論や語りの中にさえ、自身の主題をより魅力的なものに、あるいは受け入れやすいものにしようとする、そして自著の売れ行きを良くしようとする〔書き手の〕意図が潜んでいるのです²²。

史料と同様に、それをを用いて作られる歴史叙述もまた「個人的で選択的」であるという指摘は、歴史を発信する側・受け取る側双方に、その妥当性について自ら判断する責任を課すものである。私たちは、つねに批判的な目を持ちながら(報道や歴史叙述の真偽を問い続けながら)、これまでの/これからの陸軍について考えていかなければならない。そして少し視野を広げれば、同じことは軍隊以外の、あるいは歴史以外のあらゆる問題についても指摘することができる。高度な情報化社会を生きる私たちには、



見学学習用リーフレット「戦争と社会」表紙

溢れる情報に批判的・客観的に対処することが求められているのであり、こうした点を学習者に理解させること、そのための能力（リテラシー）を涵養することが、本課題に込められた最も根本的な目標であろうと推測されるのである。

おわりに

以上を踏まえて、リニューアル後のNAMの特徴は、次の3点にまとめられるだろう。第一に、近年の軍事史研究の成果に基づき、従来とは異なる形で英国陸軍の過去を考察していること。これは、「新しい軍事史」の隆盛によって急速に開きつつあった、軍事史研究と軍事／戦争博物館の距離が縮まっていることを意味しているだろう。また第二に、そうした新たな歴史的考察を踏まえて、現在・未来において陸軍がどうあるべきかについて、見学者に真剣に問いかけていること。これは軍隊博物館としての本来の役割に沿ったものであるが、忘れてならないのは、特定の見解・解釈を上から押しつけるやり方が採られていないことである。すなわち、これが第三の特徴であるが、できる限り多様な見解・主張を取り上げることで、見学者どうし、見学者と展示者との間の対話と議論が目指されている。これは、21世紀の博物館において強調されている「フォーラム」としての役割に合致するものと解釈することができる。これら3点に付随して、見る側を引きつける展示上の工夫、たとえば見学者による体験の重視や展示のスペクタクル化／アトラクション化なども指摘することができるだろう²³。

こうした特徴について、筆者は積極的に評価する立場をとる。もちろん、新NAMの展示に問題がないわけではない。たとえば、クロノロジーよりもテーマを重視する展示方法は、個々の時代や事件の意味を薄れさせ、その結果として、見学者に各テーマについてアナクロニスティックな理解を与えてしまう危険性があり、また、「軍人」という言葉が将校／兵士の区別なく用いられていることで、両者間の（実際にはとてつもなく大きな）差異が見過ごされてしまっているように感じられる²⁴。また「洞察」ギャラリーに典型的に表れているように、全体として、ヨーロッパや世界との関わりについての検討が不十分である。さらに、英国陸軍と一般の人々をつなぐという使命に照らして考えたとき、陸軍否定論をも許容しかねない新NAMの一步引いた姿勢には、おそらく異論もありうるであろう。

ただそのような（論者によってはもっと挙げられるであろう）問題点は、部分的には特別展示において補うことができるし、またそもそもNAMだけで解決すべきものではないとも考えられる。一つの博物館でできることには自ずと限界があるのであって、そうだとすれば、個性ある複数の博物館がそれぞれの強みを生かしつつ足りない部分を補い合っていくのが、博物館・見学者双方にとって最も現実的で望ましいやり方のように思われる。この点においてNAMに求められるのは、他の軍隊博物館²⁵や軍事／戦争博物館（たとえば、2014年にリニューアルオープンした「帝国戦争博物館（Imperial War Museum, London）」など）との連携を積極的に進めていくことである。そうしたコラボレーションを通じて初めて、見学者はNAMの展示の内容・方法を相対化する視点を身につけ、それに対し適切な評価を与えていくことができるであろう。そうであってこそ、NAMが喚起する「人々の議論」は、英国陸軍の今後のあり方を決定していく上での（一つの）指針として十分な説得力を持ちうるのである。

¹ 2015～17年度文部科学省科学研究費補助金による共同研究プロジェクト「戦争叙述のための博物館の可能性 - 歴史の方法の有効性について」（基盤研究B、代表者：佐々木真、課題番号：15H03259）。本論文は、このプロジェクトの成果の一部である。

² 「国立」という訳語に関しては若干の説明が必要であろう。NAMは、正確には「政府外公共機関（Non-Departmental Public Body）」というカテゴリに属する独立法人である（NAM以外の軍隊博物館も同様）。政府の直接の管理下にあるわけではないが、毎年国防省から助成金の交付を受けている。

³ 退役した英国陸軍軍人のための居住型養護施設。1692年に開設された。

⁴ Ministry of Defence, *Review of the service museums: National Museum of the Royal Navy, National Army Museum and Royal Air Force Museum*, January 2017, p. 9.

(https://assets.publishing.service.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/590669/20170209_Museum_Review_Final_Report.pdf, last accessed 27 Nov. 2018.)

⁵ 「新しい軍事史」については、さしあたり、阪口修平・丸島宏太編『近代ヨーロッパの探究② 軍隊』ミネルヴァ書房、2009年；阪口編『歴史と軍隊 - 軍事史の新しい地平』創元社、2010年；鈴木直志『広義の軍事史と近世ドイツ - 集権的アリストクラシー・近代転換期』彩流社、2014年；同『広義の軍事史』の射程『海外事情』65巻4号、2017年、38～51頁を参照。

⁶ *Review of the service museums*, p. 10.

⁷ Hannah Ellis-Petersen, 'National Army Museum unveils expansion plan', *The Guardian*, online article, 29 April 2014. (<https://www.theguardian.com/culture/2014/apr/29/national-army-museum-expansion-plan>, last accessed 27 Nov. 2018.)

⁸ Adrian Murphy, 'National Army Museum reopens following three-year £23m development', *Museums + Heritage Advisor*, online article, 30 March 2017.

(<https://advisor.museumsandheritage.com/features/national-army-museum-reopens-following-three-year-23m-development/>, last accessed 27 Nov. 2018.)

⁹ 近年の軍事社会史研究の成果については、註5の文献および、I. F. W. Beckett, *A guide to British military history: the subject and the sources*, Barnsley, 2016を参照。

¹⁰ 名誉革命によって確立する、イギリスにおける陸軍の独特のあり方については、Hew Strachan, *The politics of the British army*, Oxford, 1997, ch. 3; 辻本論「イングランドにおける常備軍の成立 - ウィリアム三世期の常備軍論争」『歴史学研究』819号、2006年、1～22頁を参照。

¹¹ 'National Army Museum reopens'.

¹² この点については、小島道裕『イギリスの博物館で - 博物館教育の現場から』歴博ブックレット⑩、2000年、51～57頁；村田麻里子『思想としてのミュージアム - ものと空間のメディア論』人文書院、2014年、第5章；Nick Prior, 'Postmodern restructurings', in Sharon Macdonald, ed., *A companion to museum studies*, Chichester, 2011, pp. 514-518を参照。

¹³ 'National Army Museum reopens'.

¹⁴ 「陸軍」ギャラリー内の展示ボードより筆者が訳出。

¹⁵ 「社会」ギャラリー内の展示ボードより筆者が訳出。なお、同じボードには、陸軍や軍人のあり方に関して過去の人物の多様な見解が引用されており、またボードの下には「陸軍」ギャラリーのものと同じ仕組みのアンケートコーナーが設けられている。

¹⁶ *National Army Museum guidebook*, 2017, p. 48. ガイドブックは館内で購入することができる。

¹⁷ 博物館を「フォーラム」として捉える見方については、「討論 歴史展示とは何か」（国立歴史民俗博物館編『歴史展示とは何か』アム・プロモーション、2003年、193～229頁、とくに224～228頁）；ミヒヤエル・パーモンティエ（眞壁宏幹訳）『ミュージアム・エデュケーション - 感性と知性を拓く想起空間』慶應義塾大学出版会、2012年、第II部；竹沢尚一郎「フォーラムとしてのミュージアム」（竹沢編『ミュージアムと負の記憶 - 戦争・公害・疾病・災害：人類の負の記憶をどう展示するか』東信堂、2015年、3～36頁）を参照。

¹⁸ *Review of the service museums*, p. 11.

¹⁹ <https://www.nam.ac.uk/schools>, last accessed 27 Nov. 2018.

²⁰ 英国の学校教育は学習者の年齢に応じて5つの段階（Key Stage [KS]）に区切られている。初等教育段階：KS1（5～7歳：第1・2学年）、KS2（7～11歳：第3～6学年）；中等教育段階：KS3（11～14歳：第7～9学年）、KS4（14～16歳：第10・11学年）、KS5（16～18歳：第12・13学年）。

²¹ リーフレットはNAMのウェブサイトからダウンロードすることができる。

(<https://www.nam.ac.uk/schools/learning-resources/war-and-society>, last accessed 27 Nov. 2018.)

²² 「社会」ギャラリー内の展示ボードより筆者が訳出。

²³ ただし、展示のスペクタクル化／アトラクション化と、その結果としての博物館の「娯楽産業化」に対しては批判的な見解が繰り返して示されてきた。小島前掲書、57頁；パーモンティエ前掲書、193頁；光岡寿郎『変貌するミュージアムコミュニケーション - 来館者と展示空間をめぐるメディア論的想像力』せりか書房、2017年、22～31、124～125、140～144、235～237頁。

²⁴ これらの点については、Michael Reeve, 'Museum review - the National Army Museum, London', *The Social History Blog*, online article, 22 May 2017も参照。

(<http://socialhistoryblog.com/museum-review-the-national-army-museum-london-by-michael-reeve/>, last accessed 27 Nov. 2018.)

²⁵ イギリスには、NAMと類似の軍隊博物館として、「国立海軍博物館（National Museum of the Royal Navy）」、「国立空軍博物館（Royal Air Force Museum）」がある。また個別部隊ごとの小規模な博物館が各地に点在しており、その数は140にもものぼる。詳しくは、*The AMOT guide to military museums in the UK*, 2010/11 edition, London, 2010を参照。